

維盛都落

寿永二年七月二十五日、木曾義仲北国より五万余騎で都に攻めのぼると聞こえしかば、平家都を落ち行きけり。

小松三位中将維盛卿は、日ごろよりおぼしめしうけられたりけれども、さしあたっては悲しかりけり。北の方と申すは、故中御門新大納言成親卿の御娘なり。桃顔露にほころび、紅粉眼に媚をなし、柳髪風に乱るよそほひ、又人あるべしとも見え給はず。六代御前とて、生年十になり給ふ若君、その妹八歳の姫君おはしけり。この人々皆おくれじとしたひ給へば、三位中将宣ひけるは、「日ごろ申しし様に、われは一門に具して西国の方へ落ち行くなり。いづくまでも具し奉るべけれども、道にも敵待つなれば、心やすうとほらん事もありがたし。たとひわれ討たれたりと聞き給ふとも、様など変へ給ふ事はゆめゆめあるべからず。そのゆゑは、いかならん人にも見えて、身をもたすけ、をさなき者どもをもはぐみ給ふべし。情をかくる人もなどかなかるべき」とやうやうになくさめ給へども、北の方とかうの返事もし給はず、ひきかづきてぞふし給ふ。すでにうっ立たんとし給へば、袖にすがって、「都には父もなし、母もなし。捨てられ参らせ後、又誰にかは見ゆべきに、いかならん人にも見えよなど承るこそうらめしけれ。いづくまでもともなひ奉り、同じ野原の露とも消え、一つ底の水屑ともならんところ契りしに、さればさ夜の寢覚のむつごとは皆偽りになりけり。をさなき者どもをば、誰に見ゆづり、いかにせよとかおぼしめす。うらめしうもどめ給ふ物かな」と、且つうはうらみ且つうはしたひ給へば、三位中将宣ひけるは、「誠に人は十三、われは十五より見そめ奉り、火のなか水の底へも共にいり、共に沈み、限ある別路までもおくれ先だたじとこそ申ししかども、ゆくゑも知らぬ旅の空にてうき目を見せ奉らんもうたてかるべし。いづくの浦にも心やすう落ちついたらば、それよりしてこそ迎へに人をも奉らめ」とて、思ひきってぞたたれける。

寿永二年（1183）7月25日、木曾義仲が北陸から五万余騎で都に攻め上るとのうわさがあったので、平家は都を落ちていった。

小松三位中将維盛卿は、最近はこの事態を予想していたけれど、いざとなると悲しかった。北の方というのは、故中御門新大納言成親卿の娘である。美しい顔は桃の花が露にぬれて咲いたよう、紅おしろいをつけた頬あでやかなまざし、美しい髪が風に乱るさまは、これほど美しい人が他にいたとも思えない。六代御前とって、十歳になる若君、その妹の八歳の姫君がいた。これらの人々が皆一緒に行きたいと慕うので、維盛卿が言うには、「日ごろ言っていたように、私は一門とともに西国の方へ落ちて行くのだ。どこまでも連れて行きたいけれど、途中に敵が待つそうなので、安心して通ることも難しい。たとえ私が討たれたと聞いても、決して出家などしてはならない。そのわけは、どのような人とも結婚して、あなたも暮らしを立て、幼い子どもたちを育てなさい。情けをかける人もきつといるはずですよ」といろいろ慰めるけれど、北の方はなにも返事をせず、衣を頭からかぶって泣き伏す。いよいよ出立しようとする、袖にすがって、「都には父もいない、母もいない。捨てられたあとは、誰とも結婚するつもりもないのに、どのような人とも結婚せよなどと言われるのはうらめしい。どこまでもついていって、同じ野原で命を終え、同じ水底に沈もうと約束したのに、それでは夜の寝床での親密な語らいはみな偽りになってしまう。幼い子どもたちを誰にゆだねて、どうせよとお考えなのですか。うらめしい、私を置いていくのですね」と、一方では恨み、一方では離れがたく思うので、維盛卿が言うには、「ほんとうにあなたは13歳、わたしは15歳のときから見初めて、火の中水の底へもともに入り、ともに沈み、命が終わるときも遅れ先立つことはするまいと言ったけれど、ゆくゑも知らぬ旅の空でつらい目にあわせるのも気の毒だ。どこの浦にでも安心して落ちついたら、それから迎への者をよこそう」と言っ、思い切っで出立した。

中門の廊に出でて、鎧とって着、馬ひき寄せさせ、既に乘らんとし給へば、六代御前、姫君はしり出でて、父の鎧の袖、草摺に取りつき、「是はさればいづちへとて、わたらせ給ふぞ。我も参らん、われもゆかん」と面々にしたひ泣き給ふにぞ、うき世のきづなとおぼえて、三位中将いとどせんかたなげには見えられける。

さる程に、御弟新三位中将資盛卿、左中将清経、同少将有盛、丹後侍従忠房、備中守師盛、兄弟五騎、乗りながら門のうちへ打ち入り、庭にひかへて、「行幸は遙かにのびさせ給ひぬらん。いかにや今まで」と声々に申されければ、三位中将馬にうち乗って出で給ふが、猶ひっかへし、縁のきはへうち寄せて、弓の弭で御簾をざっとかきあげ、「これ御覧ぜよ、おのおの。をさなき子どもがあまりにしたひ候ふを、とかうこしらへおかんと仕るほどに、存の外の遅参」と宣ひもあへず泣かれければ、庭にひかへ給へる人々、皆鎧の袖をぞぬらされける。

ここに斎藤五、斎藤六とて、兄は十九、弟は十七になる侍あり。三位中将の御馬の左右のみづつきにとりつき、いづくまでも御供仕るべき由申せば、三位中将宣ひけるは、「おのれらが父斎藤別当実盛北国へくだし時、汝等が頻りに供せうと言ひしかども、『存ずるむねがあるぞ』とて、汝等をとどめおき、北国へくだって遂に討死したりけるは、かかるべかりける事を、ふるい者でかねて知りたりけるにこそ。あの六代をとどめて行くに、心やすう扶持すべき者のなきぞ。ただ理をまげてとどまれ」と宣へば、力およばず涙をおさへてとどまりぬ。若君、姫君、御簾の外までまろび出でて人の聞くをもはばからず、声をはかりにぞをめきさけび給ひける。この声々耳の底にとどまって、西海のたつ浪のうへ、吹く風の音までも聞く様にこそ思はれけめ。

平家都を落ち行くに、六波羅、池殿、小松殿、八条、西八条以下、一門の卿相雲客の家々二十余ヶ所、付々の輩の宿所宿所、京白河に四五万間の在家、一度に火をかけて皆焼き払ふ。

中門の廊下に出で、鎧を着、馬をひき寄せさせ、いざ乗ろうとすると、六代御前と姫君が走り出で、父の鎧の袖や草摺に取りついて、「まあ、父上はどこにいらっしやるの。私も参ります」「私も行く」とめいめいに離れがたく思って泣くので、この世の離れられない結びつきだと思って、維盛卿はますます途方に暮れるように思えた。

そのうち、弟の新三位中将資盛卿、左中将清経、同少将有盛、丹後侍従忠房、備中守師盛の兄弟五騎が、馬に乗ったまま門の中へ入り、庭で馬を引きおさえて、「行幸は遠くまで進んでしまいました。どうして今まで出立なさらないのか」と口々に言うので、維盛卿は馬に乗って外に出たが、また引き返して、縁のそばに馬を寄せて、弓の弭で御簾をざっとかきあげ、「これを御覧なさい、かたがた。幼い子どもたちがあまりに私を慕うので、あれこれ言ってきかせようとしたところ、思いのほか遅くなりました」と言い終える前に泣き出したので、庭で馬を引きおさえている人々も、皆鎧の袖を涙で濡らしたということだ。

ここに斎藤五、斎藤六とて、兄は 19 歳、弟は 17 歳になる侍がいる。維盛卿の馬の左右の轡の引き手に取りつき、「どこまでもお供いたします」と言えば、維盛卿が「おまえたちの父、斎藤別当実盛が北陸に下った時、おまえたちがしきりに供をするといったが、『考えがあるぞ』とて、おまえたちをここにとどめ、北陸に下ってついに討死にしたのは、このような時のことを、古参の者なので前からわかっていたのだなあ。あの六代を残して行くのに、安心して世話をまかせられる者がいないのだ。ただ道理をまげて残ってくれ」と言うので、力およばず涙をおさえてとどまった。若君、姫君は御簾の外まで転がり出で他人が聞くのもかまわず、声を限りに泣き叫んだ。その声が耳の奥に残って、西海にたつ浪の上で、吹く風の音までも、泣き叫ぶ声のように思われたらう。

平家は都を落ちて行く時に、六波羅、池殿、小松殿、八条、西八条以下、一門の卿相雲客の家々二十数ヶ所、従者の家々、京白河の四、五万軒の民家に一度に火をかけて皆焼き払う。